●整理作業中の遺跡紹介●

榊差遺跡ほか（草津市）

古代の「長舎」といわれる巨大な掘立柱建物が発見されました。6m×45mを測り、史跡近江国庁跡の東脇殿の基壇とほぼ同規模となります。古代の役所関連の遺構と考えられますが、その機能については現在も検討中です。その他、鉄の生産に関する遺物などもたくさん出土しています。

古代の長舎

松原内湖遺跡（彦根市）

平成 24 年度からの調査により、縄文時代から江戸時代に至る、さまざまな時代の遺物や遺構を発見しました。特に中世の集落跡からは、たくさんの柱穴が見つかったほか、屋敷や集落の境界に吊るされるまじないの札「巻数板」なども出土しています。

鎌倉時代の集落

中畑・古里遺跡ほか（野洲市）

弥生時代中期のお墓「方形周溝墓」が発見されました。墓をめぐる周溝からは、お供えのために使われたと思われる弥生土器が多数出土しています。その他、奈良時代や平安時代の掘立柱建物や井戸なども見つかり、複数の時代の集落であることが判明しました。

2 基の方形周溝墓

番場遺跡・播沢遺跡（日野町）

古代の川が見つかり、そこから刀の形をした木製品が出土しました。お祀りの道具で、上流から流れてきたと考えられます。その他、縄文時代の土器が埋められた穴が発見されたことで、この地域で初めて縄文人の活動の痕跡を把握することができました。

刀の形をした木製品

その他の遺跡

（公財）滋賀県文化財保護協会では、ここで紹介したもののほかに、三津屋遺跡（東近江市）、比江遺跡・堂ノ後遺跡（野洲市）などの整理調査を実施しています。

整理室公開事業
埋蔵文化財整理調査中間成果報告会

あの遺跡は今！ Part.26

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。

親子でチャレンジ！ みて ふれる 考古学

こうこがくって、なんだろう？

こうこがくの仕事って、どんな仕事？

令和元年 8月3日（土）・4日（日）

主催：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

共催：滋賀県教育委員会・草津市教育委員会

Pick up!

― 大人気の将棋について とっておきの豆知識を！ ―

塩津港遺跡の「王将」

●QR で知る近江●

滋賀県文化財保護協会の最新の情報！

調査員が語るオススメの逸品！

一風変わった近江歴史の旅！

●今回紹介する遺跡の位置●

Pick up!

ー 大人気の将棋について とっておきの豆知識を！ ー

塩津港遺跡の「王将」

1. 神社と港が発見された遺跡

港のコト　神社のコト

塩津港遺跡は、琵琶湖の北端部に位置しています。平成 18 年度からの発掘調査により、平安時代の神社や、平安時代から室町時代の港町が発見されました。さらに神社の堀からは、「起請文木札」と呼ばれる、当時の人々が神への誓いを書いた札が見つかり、全国でも非常に注目を浴びている遺跡です。

そして平成 30 年度の調査では、神社の鳥居の柱、新たな起請文木札に加えて、将棋の駒「王将」が出土しました。

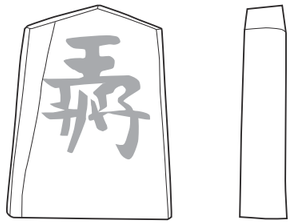
出土した「起請文木札」

2. 発掘された将棋の駒

平成 30 年度の調査で出土した「王将」は、室町時代以降のものと比べて、厚さが薄いことや、上部と下部の幅に差が見られないなど、形の違いが見られます。また裏面には墨痕らしきものがみられるものの、読み取ることはできませんでした。さて、この駒の時期ですが、神社を囲む堀から出土し、その下層からは「治承五年」（1181 年）と記された起請文木札が見つかっています。ただし、駒はその堀の上層から出土したため、時期や、神社との直接的な関係は残念ながら不明です。しかし、以前の調査では、同じく神社を囲む堀から「金将」と墨書の無い駒が合わせて 3 点出土しており、これらは神社と同時期の 12 世紀代のものと考えられることから、神社の付近で将棋を楽しんだ人達がいたと考えてもよいでしょう。

「王将」の写真

赤外線写真



「王将」実測図（実寸大）

3. 遊ぶ将棋、占う将棋

さて、神社を取り囲む堀からは、将棋の駒以外にもさまざまな遊戯具、独楽や木球（毬打と呼ばれる玉打ちの遊戯に使用する球）などが出土しています。これらは、奈良時代や平安時代においては宮中行事における神事などでも使われていたといわれています。つまり、神社周辺でこれらの遺物が出土したことは、単なる遊戯具ではなく、神事などで使用された可能性を想定することもできるのです。

では、塩津港遺跡で出土した将棋の駒について考えてみましょう。文献によると、塩津港遺跡の神社に該当する 12 世紀から 13 世紀代においては、主に貴族や僧の日記にその記述が見えることから、そういった階層の人達のたしなみだったと考えられます。それを示すかのように、発掘調査の事例を見ると、11 世紀～13 世紀代の駒は、主に寺院跡や城館跡などに偏る傾向がみられます。つまり塩津港遺跡においても、貴族などの上流階級や僧との関連がうかがえるのです。

次に将棋の使用方法について、もちろん遊戯として楽しまれていたことはいうまでもありません。一方で、平安時代の源師時の日記『長秋記』に、興味深い記述があります。ここには、鳥羽上皇が、12 の将棋の駒を使って自身を占った、というものです。つまりここから、将棋の駒は占いの道具としても使用されていた事実を読み取ることができるのです。したがって、神社の堀から出土した将棋の駒は、遊戯具としてのみでなく、このような占いの道具として使用されていたことも、ひとつの可能性として想定してもいいのかもしれません。

平成 30 年度調査で見つかった鳥居と堀

塩津港遺跡の神社のイメージ

4. 将棋に熱中するひとびと

さて、現在将棋が空前のブームを迎えています。皆さんの中にも、このブームに乗って将棋を始めた方もおられるでしょう。

塩津港遺跡の時代、貴族や僧のたしなみとして流行した将棋は、室町時代以降になると、熱中する人たちがさらに増加していきます。この時代、僧や武士の間で賭博将棋が大流行し、あまりの熱中ぶりに、賭博将棋の禁止をうたった文献も現れるようになります。かの豊臣秀吉は、人間を駒に見立てる「人間将棋」を楽しんだという言い伝えもあります。そしてその後、庶民階層にまでその流行は伝わっていき、現代へとつながっていくのです。